

【特集】ベトナム戦争

005 THE PAPER WAR
ベトナム戦争のペーパーウォー

DEATH CARD

「死の♠カード」を配り歩いた男たち
SGM Herbert Friedman(Ret)



©David Douglas Duncan

CONTENTS

ベトナム戦争小火器[トイガン]
018 VIETNAM WAR COLLECTIBLES
SMALL FIREARMS

ベトナム戦争終結42年
024 南ベトナム特殊部隊ビエット キック

028 北ベトナム特殊部隊ダッコ

032 VIETNAM ZIPPO いつも兵士のポケットにあった
愛すべきベトナムジッポー
Rolf Gerster

041 ベトナムを遠く離れて——。
第1回 モノが語りかける世界 文/小倉 徹(文化史研究家)

042 LRRP Club Cammies クラブ カミーズ
Jay Borman
迷彩服で戦場を彩ったパトロール部隊

078 トイガンニュース
WA シューティング・ターゲット
タナカ コルト・バイソン.357マグナム6インチR-MODEL
スチール・フィニッシュ
タナカ S&W M629 6 1/2インチ・SJフィニッシュ
The Equipments of the U.S. Force
088 [現用米軍装備カタログ]
'90年代特殊部隊装備始動

098 Militaria Roundup!
WWII アメリカ陸軍山岳部隊ユニフォーム
106 SHOT SHOW 2018

COMBAT FRONT LINE

052 ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書

054 東京マルイ
アルバート.W.モデル 01P

機動戦術部隊RATSも参加!
056 平成30年埼玉県警察年頭視閲式

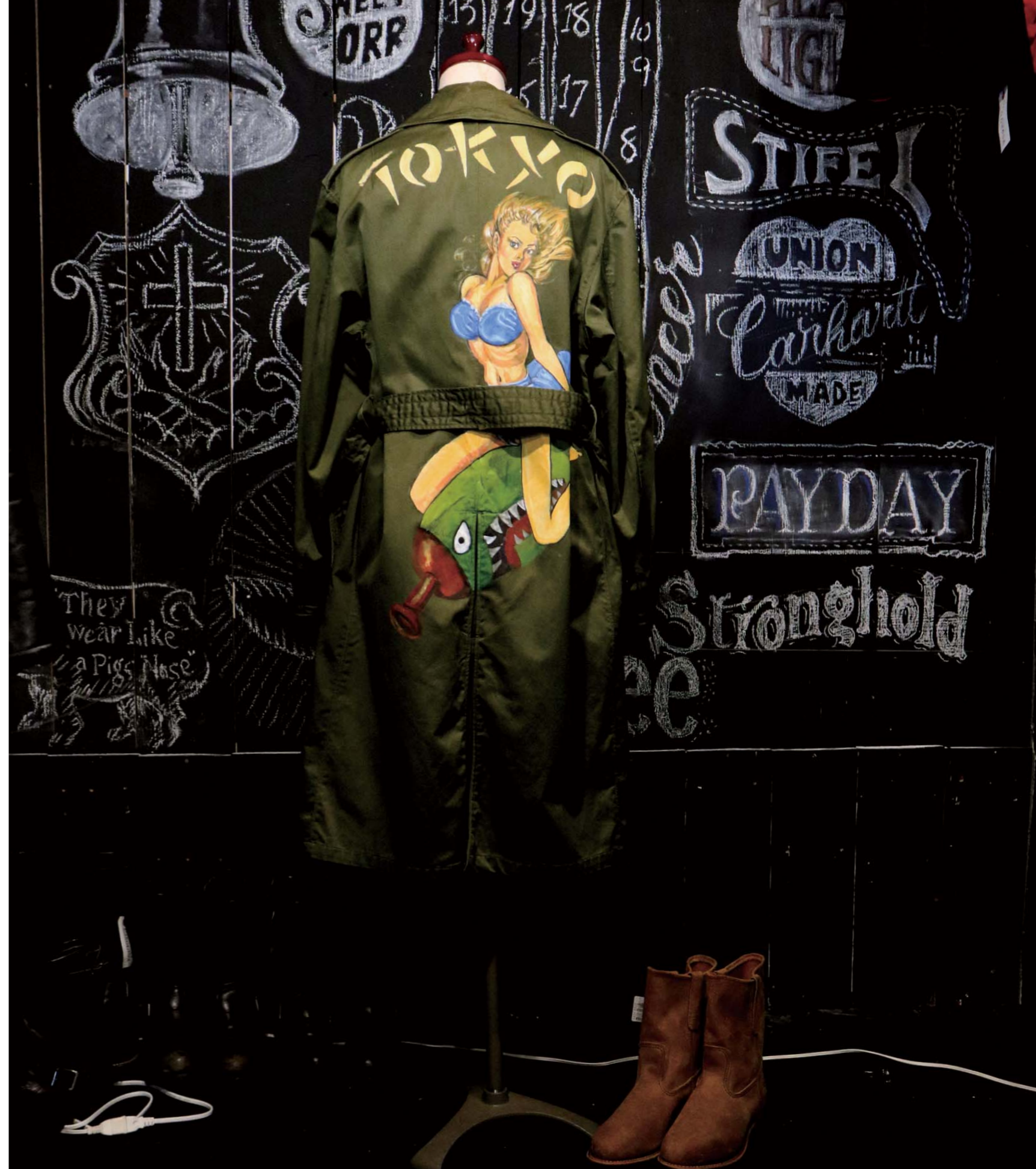
057 15時17分、パリ行き

062 東京マルイ スコーピオン MOD.M
「女子目線でぶっちゃけどうなの?」座談会!

068 WESTERN ARMS
L.A.ヴィッカーズ・カスタム・リアルスチールVer. &
ボブチャウVer.1.5ヴィンテージ・エディション

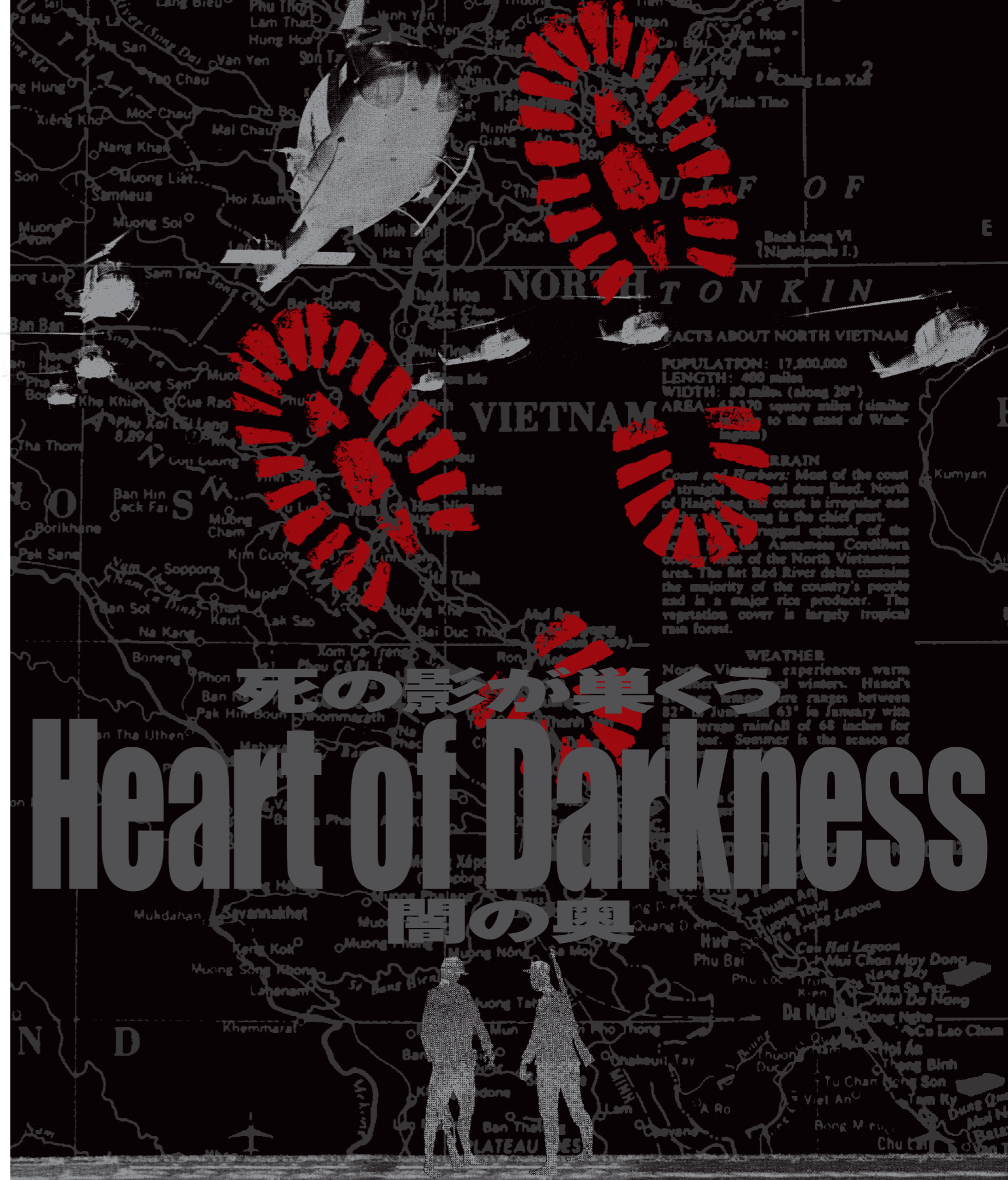
073 タナカ
S&W M629PC FLAT SIDE 3インチ・ステンレスフィニッシュ

048 MILITARY LINE
058 ニッポンの力こぶ
082 サバゲ三等兵
086 GAME OVER THE TOP
087 中田商店グッズ
104 突撃!!びっちょりーな☆
116 サバゲ三等兵APS部
118 NEW GENERATION STYLER
128 PRESENT
143 NEWS COMBAT mono
150 INTERVIEW with theVIETNAM VETS Vol.1
152 兵装嗜癖
154 アラフォース!
158 バックナンバーリスト
159 次号予告



ミリタリースポッター
ヴィンテージに新たなスパイスを——。

石川直美 (D-clothing)



FACTS ABOUT NORTH VIETNAM

POPULATION: 17,900,000
LENGTH: 400 miles
WIDTH: 80 miles (along 20°)
AREA: 63,370 square miles (similar to the state of Washington)

COAST AND HARBORS: Most of the coast is straight and deep lined. North of Haiphong the coast is irregular and Haiphong is the chief port. The rugged uplands of the Annamese Cordillera occupy most of the North Vietnamese area. The flat Red River delta contains the majority of the country's people and is a major rice producer. The vegetation cover is largely tropical rain forest.

WEATHER: North Vietnam experiences warm winters and hot summers. Haiphong's average temperature ranges between 82° in June and 61° in January with an average rainfall of 68 inches for the year. Summer is the season of

死の影が巣くつ

Heart of Darkness

闇の奥

VIETNAM ZIPPO

いつも兵士のポケットにあった 愛すべきベトナムジッポー

構成／編集部

Photos courtesy of Rolf Gerster & his Zippo collection

兵士1人に1つのZIPPO!

どこにでもあるありふれたライターだが、
ベトナムでは1対1の関係になる。
ポケットの中の指先にふれるへこみや傷は
自分だけが知っている履歴書だ。
これほど強い結びつきをくれた
ベトナムという戦場に想いを馳せる。

Photo/AP/AFLO



戦闘経験者だけに授与される歩兵戦闘章の下には、作家モーパッサンの言葉が不器用に並ぶ。持ち主がこのジッポーに込めたメッセージは一言で言えば「反戦主義者は口を出すな」である。ベトナム戦争はカンボジアまで拡大し、戦争もアメリカも混乱の極みに達していたが、平和を説く資格があるのは戦った者だけだという真理は変わらない。

空挺降下章を模した「スカルウイング」は空挺隊員や特殊部隊員に特に人気があったシンボルマークだ。DEATH FROM ABOVEつまり「降りかかる死」と呼ばれ恐れられた彼らもひとたび仕事が終われば一服の時間。「ジグザグマン」はたばこの巻き紙のキャラクターだったがこの時代にはドラッグカルチャーを象徴する物になっていた。裏面はピースマークの中に「ベトナムカンボジア戦争ゲーム関係者」のメッセージ。ベトナム戦争を壮大な茶番と皮肉のセンスが光る。スカルウイング、ピースマーク共に丁寧な仕事である。

平和のシンボルを堂々と掲げるアメリカ軍砲兵隊。服装も髪型もだらしがないが、誰一人として戦闘服を着けていないのは暑いからだけではなさそう。こうなると誰が上官かも分からないが誰かが小言を言った所で「固い事言わずに、ビールでも飲もうぜ。」と返ってくるのがオチだろう。1971年ラオス国境。



LRRP小隊の戦いぶりが非常に効果的だったので、部隊は規模を中隊規模に拡大し、偵察を表すReconnaissanceの語も外されLRP分遣隊として今まで以上の活躍を期待される事となった。第173空挺旅団のLRRP小隊は1968年2月に第74LRPデタッチメント(分遣隊)と改称。ベースキャンプはボンソン近くに移動した。看板右下のRecondoは偵察のReconとコマンドー(Commando)を合わせた造語。左はLRP隊員ビリー・ヤン。

LRRP

クラブ カミーズ Club Cammies

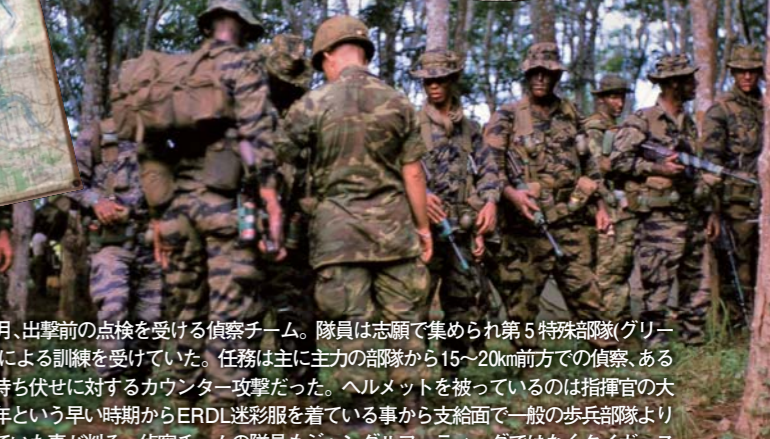
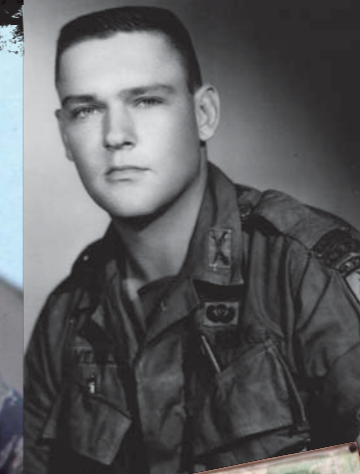
迷彩服で戦場を彩ったパトロール部隊

ベトナムでは敵のゲリラ戦術に対抗するため、部隊の目や耳となる偵察部隊が重要視された。師団や旅団ごとに編成された長距離偵察専門の部隊はLong Range Reconnaissance Patrolの頭文字を取ってLRRP(ラブ)と呼ばれ、その能力の高さから規模を拡大しながらより積極的な任務に投入されて最終的にはレンジャー部隊に統合される事となる。一般歩兵とは異なる装備と戦術で敵を大いに苦しめた彼らの活躍を第173空挺師団の例に絞って見てみよう。

by Jay Borman 構成/コンバットマガジン編集部
訳/河村喜代子

第173空挺旅団のSSI(ショルダー・スリーブ・インシグニア)の上に付けられたLRRPタブ。色は揃えてあるが官給品のSSIに比べてやや見劣りする典型的なローカルメイド品である。

第173空挺旅団のLRRP小隊に所属していたカートン・ベンチル中尉。左肩の部隊章の上には「LRRP」のタブが見え、さらにその上にレンジャータブが追加されている。右胸には南ベトナム軍空挺章と左胸ポケットにはパスファインダー章も付けられており、彼がかなりの資格マニアだった事が窺える。中尉はベトナムに3度従軍したが後の2回は特殊部隊員として数々の極秘作戦を行ったMACV-SOGの活動に関わった。左下は中尉がLRRP時代の最後の任務で使われた地図。



個人装備品は重要な物とそうでない物に分けられ、重要な物はLBEのベルトとサスベンダーに付けて肌身離さず持ち歩き、残りはリュックサックに入れていた。リュックは官給品のほかに現地製やCISOと呼ばれる物も使った。「重要な物」とは弾薬、水、ナイフ、信号機器、手榴弾、発煙弾、サバイバルキット、ファーストエイドでリュックの中には食料(LRRPレーション)、予備の水、ポンチョライナーとロープ、そしてクレイモア地雷を入れた。下の写真ではさらにCSガス催涙手榴弾も見える。破片手榴弾は7個、予備弾倉は16本持った。信号機器はシグナルミラー、フラッシュパネル、ストロボライト、ペンフレアなどが見える。左上の2クォート水筒はリュックサックに入れる「予備の水」だろう。中央のOCAR15は隊員のお好みで前方にもグリップが追加されている。写真の装備品はビリー・ヤンの物。

1966年7月、出撃前の点検を受ける偵察チーム。隊員は志願で集められ第5特殊部隊(グリーンベレー)による訓練を受けていた。任務は主に主力の部隊から15~20km前方での偵察、あるいは敵の待ち伏せに対するカウンター攻撃だった。ヘルメットを被っているのは指揮官の大尉で、66年という早い時期からERDL迷彩服を着ている事から支給面では一般の歩兵部隊より優遇されていた事が判る。偵察チームの隊員もジャングルファティークではなくタイガーストライブ迷彩服を着ているが、任務の性格上官給品ではない迷彩服を着る事が許されていた。



LRRP隊員は迷彩服を好んだが、フォーマル用としてジャングルファティークを綺麗のまま取っておくのが普通だった。右はベンチル中尉のファティークジャケット。上は66年9月、ビエンホアで出撃前の点検を行なう中尉(後姿)でタイガーストライブを着た「カミーズ」スタイルである。



フェイスペイントを塗り、ライフルにも迷彩を施したLRRP。迷彩服はいわゆるシルバートイガーパターンだが、ほかにも任務や好みに応じてさまざまな迷彩服が用いられ、迷彩のカモをもじった「カミーズ」や「クラブカミーズ」という呼び名が生まれた。LBEと呼ばれる基本装備は一般歩兵と変わらないがテーピングで音が出ない様になっている。偵察チームの編成はチームリーダー、アシスタントリーダー、ラジオマン、先頭を務めるポイントマン、最後尾のテイルガンナー、そしてライフルマンの6名でこの編成も特殊部隊の手順に沿ったもの。

東京マルイ 電動コンパクトマシンガン
スコープオン MOD.M発売記念!

SCORPION MOD.M

デカ広報と愉快的サバゲ女子の
「女子目線でぶっちゃけどうなの？」
スコープオン MOD.Mって座談会!

2月某日、東京マルイの「デカ広報」こと島村氏に誘われ、アキバベースに4人の著名なサバゲ女子が集結。そこで行われた座談会の模様を、内外メディアで唯一取材を許された我々コンマガ取材班がお伝えする!



らノーマルフェイスに早変わり！
鞆にひっかららない(笑)。
東城：そういう細かいギミックって
いかにもマルイさんって感じがす
る！(笑)
びっ：まりりんはどっちが好き？
望月：私はトゲトゲのほう(スト
ライクフェイス)。
びっ：私はよく1人でサバゲに行
くんですけど、基本電車移動なん
です。その行程を考えると、やっぱり



戦え!!びっちょりー☆
戦う!! ゆーちゅーばー、MC、声優。サイド
カー付カブを駆ってどこまでも! 基本ア
ウトドアの人。

憚らないご意見をお聞かせ下さい。
東城：金色が凄くかわいい。
望月：おしゃれですね。
MIREI：スコープオンの未来バー
ジョン。光学サイトを載せたりする
のも簡単そう。
島村：そう。ベストは、この前発売
したマイクロプロサイト。とくに今、
インドアフィールドが増えてきて
でしょう。CQB的な空間にはいい
と思うんだよね。
びっちょ (以後“びっ”)：前のス
コーピオンは「田舎から出て来た女子
大生」ってイメージだったんだけど、

新しいスコープオンは表参道や自由
が丘といった「都会で洗練された女
子大生」ってイメージ!
MIREI：これって凄く小さいけど、
もしかして普通に鞆に入る?
島村：入る入る。だから、サバゲし
たいと思ったら、ゴーグルとかど
一緒に鞆に入れてサッと出掛けられ
ちゃう。そんな時はハイダーがリ
バーシブルになっているの。
びっ：どういふ事ですか?
島村：14mmの逆ネジになっているから、
ハイダーを一度外して逆に装着する
と……はい、ストライクフェイスか

座談会のスタートは洒落たカク
テルで、まずは乾杯から——。
島村：今日は新製品スコープオン
MOD.Mの事前PRとしての座談会
という事で、軽量・コンパクト、先
鋭的なデザイン、そしてM-LOK (エ
ム・ロック レールシステム：米マ
グプル社が開発した最新規格のアクセ
サリー取付けモジュール) が可能に
した新世代の拡張性を併せ持つ同製
品について「サバゲ女子目線」で忌



MIREI
ファッション誌、サロンモデル。コスプレ
が趣味で毎日がハロウィン! 次世代
AK47のPVに出演。

●写真:Taku ●構成:狩野健一郎
●取材協力:シューティング・カフェ&バー AKIBA☆BASE
●東京マルイ ☎03-3605-3312 http://www.tokyo-marui.co.jp/

40th Anniversary

SHOT SHOW

2018

Photo&Text by Muneki Samejima (鮫島宗貴)

世界最大の銃器見本市SHOT SHOW。各社のニューモデルから最新パーツまで米国を拠点に活躍中のシューター、鮫島宗貴が徹底リポート!



とあるブースにあった2階のミーティングルームから見渡したショットショー会場の様子。広大な会場は、一か所から見渡す事は不可能だ。



ショットショーの初日は大勢の人で終日賑わう。これは初日がもう終わろうと言う頃に撮影した1枚。1日中、会場が空く事はない。

年末年始になると「あぁ、今年もショットショーか…」そんな風に考える習慣がもう数年経つ。ショットショーを迎えると新しい年が始まった事を実感する。世界最大規模の銃器トレードショー(見本市)とされるショットショーは1979年に始まり、今年は40周年記念と言う事でその歴史を感じる。当初は、6,000人以下の来場者だったショーも今ではその十倍以上の来場者数である6万人をこの数年は超えている。

さて、ショットショーは銃器業界最大のトレードショーと言う事で、銃器業界に何かしらの関りが無いとショーに入るためのパスを取る事が出来ない。写真や動画を撮影するためには、メディア関係者としての身分を証明しなければ、「メディア・パス」は取れず、撮影は許可されない。6年前に初めてショーの取材を行なったが、その時と比べると毎年、このメディア・パスの取り方が厳しくなっている。ショーへの参加申し込みは、例年であればショットショー側からメールで案内がくるのだが、僕の所にはその案内が来なかった。11月(2017年)に入っても案内が来ない事から、アメリカ人の友人にショーの事を聞くと、メールの案内が来ないと言う人が数人おり、彼らは自分たちで申し込みを行なったと言うのだ。その話を聞いていなければ危うく申し込み期間を過ぎる所だったので、ウェブサイトから自分で取材申請を行なった。そ

こで分かったのが、今年から通常のメディア、つまり世間一般のニュースを報道する事が主なメディアは入場を許されない事になったのだ。これは、銃器業界への影響を考慮しての事だ。一般のテレビ局や新聞社などは、ショーの様子を好意的に伝えるとは限らない。今年から入場が許可されるのは、銃器業界との関りが大きく、ショーの内容を伝える事が業界にとってプラスになるメディアだけになったのだ。数年前に日本のテレビ局のクルーを見かけた事があったが、確かに彼らがショーの様子を銃器業界のプラスになるように報道をするとは思えなかった。だが問題だったのは、銃器業界と関りがあるメディア関係者もその影響を受けてパスが取りにくい状況が生まれた事だ。いつも人で賑わうプレスルームも今年は人の数が少なかったように思う。さらに荷物を預かってくれるクロークは先に閉まってしまおうし、最終日にはプレスルーム自体が早々に閉まってしまおうなど、今年はメディアに対する扱いがいつもより悪い気がした。そんな事もあり、コンパクトマガジンからショーを取材するのは、僕一人となってしまった。いつもは2番手で降った僕にとっては、ショーの様子をしっかりと伝えられるか不安はあるが、今年もアリゾナからラスベガスにドライブし、ショーの様子を取材してきたのでその様子をお届けしよう。

ショー最終日になると、ようやく人が減り、撮影や取材がスムーズに進む(苦笑)。人気のS&Wのブースであっても人が少ないのがよく分かる。